

## 芭蕉と宗祇

— 紀行を通して見た世界 —

小瀬 渺 美

## Basho and Sogi

The Poetic World studied through their  
Literary Accounts of Travels

Hiromi KOSE

In *Oinokobumi Basho*, thinking that there is only one that is appreciated commonly, put *Saigyō* and *Sogi's* poetic soul and his *haikai* world into the same origin.

I tried to throw light on how *Basho* built up his poetic soul by means of thinking about suggestions *Basho's* "Shigure" received from *Sogi* and comparing the section of *Nasuno* in *Okunohosomichi* with *Sogi's Shirakawakiko* which was written by taking the same place as the object.

芭蕉は「笈の小文」において

「つゐに無能無芸(ママ)にして只此一筋に繋る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る処花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。」

と述べている。これは芭蕉の風雅観を示すものとして代表的な意見であるが、ここで芭蕉が「無能無芸」と言っているのは、現実に対する消極的、あるいは卑小な逃避ではなく、世俗的な地位・名誉・財貨といった欲望から超脱し、「此一筋」、すなわち俳諧に生きることを、逆説的に自己肯定したものである。

その俳諧については、西行の和歌・宗祇の連歌・雪舟の絵画・利休の茶道といった中世以来の伝統的芸術が持つ精神的基盤を、「貫道するものは一なり」と理解し、それぞれの伝統芸術が、その形態や表現方法は異なっているとしても、その在り方を「造化にしたがひて四時を友と」し「造化にしたがひ、造化にかへ」という、いわゆる造

化随順を基本精神として、和歌・連歌・絵画・茶道を同一延長線上に位置づけて考えているわけである。

さらに芭蕉は、和歌・連歌の理想的な在り方を、西行・宗祇に求めたわけであるが、その基本的態度として、「古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ草鞋に足をかため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて物の実をしることをよろこべり。<sup>1)</sup>」

といった姿を理想と考えている。このことばは、近江彦根藩士であった許六が、元禄6年5月帰藩の折に、芭蕉が、色紙・短冊と共に送り届けたものと思われるが、ここに窺うことのできるのは、「後に笈をかけ草鞋に足をかため、破笠に霜露をいとふ」素朴な旅を通して対象を凝視し、「物の実をしる」ことを至上とする、きびしい主体的な実践的体験を通して風雅の誠を体得するところに、その理想を求めたものである。

『奥の細道』の冒頭の部分の

「月日へ百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟(ママ)の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」

と併せ考えるとき、月日を百代の過客としてとらえ、流れゆく時を旅人と認識した芭蕉にとって、「古人」はおのずから限定されようが、少なくとも「造化随順」を実践した「風雅に情ある人々」ということになり、通説の如く、李白・杜甫といった旅の詩人、能因・西行・宗祇といった漂泊の歌人ということになる。そしてそれら「風雅に情ある人々」を同一精神基盤の上に規定しつつ、「古人も多く旅に死せるあり」「予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやまず。」と、「古人」と「予」とを対比して意識していることにより、西行・宗祇に流れている風雅の精神的系譜の中に、芭蕉は自身を位置づけようとしていることが知られるのである。

これは、其角の言を借りるならば、

「須磨・明石の夜泊、淡路島の明ほの、杖を引はてしもなく、きさがたに能因、木曾路に兼好、二見に西行、高野に寂蓮、越後の縁は宗祇・宗長、白川に兼載の草庵、いづれもいづれも故人ながら、芭蕉翁についてまぼろしに見え、いざやいざやとさそはれけん、行衛の空もたのしくや<sup>2)</sup>」

と、芭蕉は同一精神基盤である風雅ある人々の行跡をたずね、歌枕を巡歴し、それらの作品を背景にした文章や俳諧となって反映されることになったわけであり、これが、芭蕉の風雅に対する自己認識の表れとみることができよう。

ところで、これら先人を意識したり、自らそれらの歌人たちの作品と同じ位置に自己を位置づけようとした芭蕉の発言や作品は多いが、今、これを宗祇とのかかわりに限っていささか考察をすすめてみることにしたい。

芭蕉の句に「手づから雨のわび笠をはりて」の前書を付した

世にふるもさらに宗祇のやどり哉<sup>3)</sup>

の作品がある。

これは、宗祇の

世にふるもさらにしぐれの宿りかな<sup>4)</sup>

を背景にした句であることは言うまでもない。さらにこの宗祇の句は、『新古今集』二条院讃岐の歌

世に経るもくるしきものをまきの屋にやすくも過ぐるむら時雨かな

によっている。

二条院讃岐の歌は、楨の屋を通りすぎるむら時雨の、さらさらと音をたてて、たちまちの間に過ぎゆく安らかさと対比して、世にふることすなわち人生を生きること

は苦しいものであることを叙したものである。しかも、「やすくも過ぐる」と「くるしきもの」という、難易・軽重の対照的表現により、人生に対する悲哀感が具象的に迫ってくる。

宗祇は、この二条院讃岐の人生への哀感を旅の客舎に転移せしめ、人生を旅に仮托しての所感を述べたものである。「ふる」は「経る」であり「降る」でもある。世の中に生きることは実におびしいことであり、それは時雨わびしく降り過ぎる旅の宿りの如く、いわば人生は仮りの住いであると見、時雨降る旅の宿りもそれなりにまた安らぎもあると観じたのである。

芭蕉の句は、宗祇の句の時雨から受けとめられる世界を踏まえながら、宗祇を追慕する自己の姿をとらえたものである。宗祇の「時雨の宿り」を「宗祇の宿り」と置き換えることによって、宗祇の句が、応仁の乱による乱世に生きる流離無常の感懐を和歌的詠嘆的に表現したのに対し、芭蕉は宗祇の人生への悲哀感を下敷きにし、それに依存しながら、宗祇への敬慕という客観的な事実を表面に押し出している。芭蕉の句の前書き「手づから雨のわび笠をはりて」も、自らわび笠をはって、自分を宗祇に擬し、我もまた宗祇の如しと言っているわけで、宗祇の心情を肯定しながら、その境涯から自己の感慨を引き出している。

そうみるとき、この

世にふるもさらに宗祇のやどり哉<sup>5)</sup>  
は、『泊船集』にみられる

世にふるもさらに宗祇のしぐれ哉<sup>6)</sup>  
の「しぐれ」という季語を含む句以外には、『和漢文操』<sup>7)</sup>、『笈日記』<sup>8)</sup>に所収の異形の句も、ここに引いた『虚栗』の句も、いずれも季語がなく、いわゆる雑の句であるが、法橋吾山の言う

「翁の発句も其意を称美して無季にして季を含蓄せるものか、骨折らずして心の働きある場、まことに感あり<sup>9)</sup>」

のことばのように、無季、雑の句ではあるが、宗祇の「しぐれ」の句を踏まえていることから、時雨、すなわち冬季の句とするのが妥当であろう。

芭蕉と宗祇のかかわりを考えることのできる作品に、ほかに次の発句がある。

藤の実<sup>10)</sup>は俳諧にせん花の跡

これには、

「関の素牛何がし、大垣の旅店を訪はれ侍りに、彼

ふじしろみさかといひけん花は宗祇のむかしに匂ひて、」

と前書が付されている。

前書では、素牛（惟然）の生地「関」ということばかり、かつて宗祇が

「美濃国関といふ所の山寺に藤の咲きたるを見て吟じ給ふとかや」

と袖書きのある

関こえて爰も藤しろみさか<sup>11)</sup>哉

と吟じたことを想起し、「花は宗祇のむかしに匂ひて」と前書に表したものであろう。

宗祇の句の「藤しろみさか」については、『茜堀』<sup>12)</sup>に、

「藤代深坂といふは紀の国の名所にて、紀の関を越えて熊野路へ出るに必ず此坂にかゝる。立こまれる坂なれば深坂といふ。紀御井寺に近き所也。故に宗祇の美濃の国関にて藤の咲きたるを見て、故郷の二ヶ所の名所を思ひ合せて此吟は有りける也。宗祇は紀州の人なればなり」

とあり、その地理的概況を理解することができる。

芭蕉は、宗祇が、「藤しろみさか」を想起し、「こゝも」と、藤の花の美しく咲き誇っている「藤しろみさか」を思いつつ、現実の目前の光景にその「藤しろみさか」と同様、あるいはそれ以上の美観を感じたことを叙した句に対して、「花の跡」と宗祇を讃揚しつつ、自らの俳諧の世界を「藤の実は」と述べたわけである。

『笈の底』<sup>13)</sup>には、このあたりの経緯を次のように説明している。

「此句は前文の趣亦宗祇の吟に鑑し味べき也。其の意は先ツ宗祇法師は連歌に藤花を吟ず。我は亦其实を以て俳諧にせんと也。誠に花の優しきは連歌也。実の異風なるは俳諧成べし。今案、此花の跡を云詞、宗祇を差て称美の語也。則、宗祇の跡を慕の意にして、花の跡と云。実を俳諧と云。是心の俳諧にして、滑稽と云べし」

この『笈の底』にも触れているように、「花の跡」にこめられた憶いに、芭蕉の宗祇享受の姿勢を見ることが出来る。

即ち「花の跡」は花の散った後の意を表すのではあるが、芭蕉の受けとめたものは「花」ということばかり、美しく咲いている藤の花を詠ずる態度を連歌のひとつの典型とみたわけで、藤の実は、美的感覚からすれば、さほど美しさもなく、風情にも乏しいものである。藤の花

は連歌にふさわしい情調の世界である。すなわち、藤の花の咲き誇る美しさ、白または紫の花房が垂れ下がっている色彩感などは、まさに連歌の世界である。それに比して「藤の実」の句は「花の跡」に読みとれるように、藤の実はかざり気がなく、わびしささえ感じさせる素材であるのは事実である。そこで「花の跡」は、単に宗祇のころには藤の名所にふさわしく、はなやかに咲き垂れていたであろうという回想的類推だけではなく、宗祇そのものを追慕する気持ちが強く感じられ、併せて「藤の実」は、連歌的情調の世界から、俳諧的風情への転換をはかったものである。

そこに、芭蕉の風雅に対する受けとめ方が見られるのであるが、宗祇の和歌・連歌にみられる情趣の世界への志向を肯定追慕して受容しながら、質朴の世界に俳諧の真趣を求めようとする芭蕉の態度をみるのできるのである。

ところで、以上見てきたのは発句にみられる宗祇と芭蕉との風雅に対する受けとめ方の相違であるが、これが紀行文の世界ではどうであろうか。

宗祇と芭蕉とが、同じ場面をとらえた紀行文として、宗祇の『白河紀行』と芭蕉<sup>14)</sup>『奥の細道』の那須野の条とを対比して考えてみたい。

宗祇の『白河紀行』の概要は、

ある人（結城直朝）の招きで、下野塩谷を時雨空に不安を抱きながら、若侍二騎、道者などを連れだつて出立した宗祇の一行は、那須野にかかると、丈高い萱が道を塞ぎ、弓の先が見えないほどである。

武蔵野のように古歌にちなむ名所もなく不安である。初冬の枯れ色の中の篠の葉露に実朝の詠歌を思い出し、少しの風情も覚えたが、このごろの重なる悲しみに

歎かじよこの世は誰も憂き旅と思ひなす野の露にまかせて

と詠った。

人々も歌に思いを述べたりしながら、大俵に着き、下賤の者の家に泊り、粗末な食事に泣きつ笑いつ語り明かした。

宿の主は情深い人で馬の手配を受け出発した。

あたりの景色は紅葉して昨日とかわらず、虫の音さえかすかにしか聞こえない。

柞の原の枯れた景に、物悲しい思いで通り、柏の紅葉や櫟の林をみると、佐保川・伊勢の宮川が思い起こさ

れ、紅葉が常磐木に交じる様は、大井川さえ思い出される。

中川を渡ろうとすると、泡立った水のしぶぎに、足の弱い馬の足掻きに袖が濡れ、万葉集の「武庫川の渡り」もかくやと思われた。

といった内容であり、一方『奥の細道』の那須野を越えて行く部分の大意は

那須の黒羽の知人のもとへ、野越えて直接近道を行こうとした。

遠くに村里を望みながら行くと、途中雨に遭い、夕暮れとなった。

農夫の家に一夜の宿を借りて泊り、翌日は再び野を分けて進んだ。

そこに放牧の馬が居り、草を刈っている男に頼んでみると、田夫野人ながら人情を解し、

「どうしましょう。この野は道が縦横に入り組んでいて、土地不案内の旅人では迷いそうだ。馬の止まったところで返してください。」

と馬を貸してくれた。

幼い子が二人、後を追って来る。ひとは小娘で、名を聞くと「かさね」という。珍しく風流な名だったので一句を作った。

かさねとハ八重撫子の名成べし 曾良

程なく人里に着いたので、礼を結びつけて馬を返した。という概要である。

ところが『奥の細道』に随った曾良の『奥の細道随行日記』をみると、

一同二日<sup>15)</sup> 天気快晴辰ノ中刻宿ヲ出ウラ見ノ滝カンマンガ湖見巡漸ク及午鉢石ヲ立奈須太田原へ趣常ニハ今市へ戻リテ大渡リト云所ヘカ、ルト云トモ五左衛門案内ヲ教ヘ日光ヨリ廿町程下リ左ヘノ方へ切レ川ヲ越セノ尾川室ト云村ヘカカリ大渡リト云馬次ニ至ル三リニ少シ遠シ

○今市ヨリ大渡ヘ式リ餘○大渡ヨリ船入ヘ壱リ半ト云トモ壱里程有絹川ヲカリ橋有大形ハ船渡シ○船入ル玉入ヘ式リ未ノ上刻ヨリ雷雨甚強漸ク玉入ヘ着一同晩玉入泊宿悪故無理ニ名主ノ家入テ宿カル

一同三日 快晴辰ノ上刻玉入ヲ立

鷹内ヘ二リ八丁鷹内ガヤイタヘ壱リニ近シヤイタヨリ澤村ヘ壱リ澤村ヨリ太田原ヘ二リ八丁太田原ヨリ黒羽根ヘ三リト云トモニ餘乙

とあり、『奥の細道随行日記』中の「俳諧書留」には、那

須野あたりの記録は全く触れていない。

従って『随行日記』そのものにも誤りや誤記もあろうけれども、一応『随行日記』を信ずるに足るとするならば、『奥の細道』の描写のうち

「是より野越にかかりて、直道をゆかんとす遙に一村を見かけて行に雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば、又野中を行」

の前半部分だけが事実で、<sup>(ママ)</sup>「草刈おのこ」に馬を借りたことも、まして「ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる」部分、「かさねとは」の句のこと、「鞍つぽに」あたいを結びつけて馬を返したことなど、事実ではなく、虚構乃至はさほど心に留まらない事からであったので<sup>16)</sup>あろうかとさえ思われる。しかし実際に『陸奥衛』にも

「陸奥にくだらむとして、下野国まで旅けるに、那須の黒羽と云所に翠桃何某の住けるを尋て、深き野を分入程、道もまがふばかり草ふかければ、

秣負ふ人を枝折の夏野哉」

という句文があり、また、元禄3年夏と思われる

「みちのく行脚の時、いづれの里にかあらむ、こむめの六ツばかりとおぼしきが、いとさゝやかに、<sup>(ママ)</sup>ゑもいはずおかしけるを、名をいかにいふとゝへば、「かさね」とこたふ。いと興有名なり。都の方にてはまれ<sup>(ママ)</sup>にもきゝ侍ざりしに、いかに伝て何をかさねといふやあらん。我子あらば、此名を得させんと、道づれなる人たはぶれ侍しを思ひいでゝ、此たび思はざるゑんにひかれて名付親となり、

重ねを賀す

いく春をかかさねがさねの花ごろも<sup>(ママ)</sup>  
しはよるまでの老もみるべく<sup>17)</sup> はせを」

の句文などから、『奥の細道』の描写が全くの仮構ではなく、背景となっている事実があって本文のような描写になったことが考えられるのである。

こゝで『奥の細道』の『白河紀行』について対比しながら、同じ場面をどうとらえたか、両者の感動を形成した視点の相違について検討を加えてみたい。

まず情景の描写は『白河紀行』が

「空いたうしぐれて、行末いかにとためらひ侍り」  
「ここかしこの川音なども、袖の時雨に争ふ心地して物哀れなり」

「那須野の原といふにかゝりては、高萱道を塞ぎて、弓の筈さへ見え侍らぬに」「かゝる道には命も絶え侍

らんとかなしきに,」「是は遣る方なき心地する」  
 「四方の山紅葉しわたして, 所々散らしたるなども艶  
 なるに, 尾花, 浅茅も昨日の野に変はらず, 虫の音も  
 あるかなきかなるに,」  
 「大きな流の上に, 岸高く, 色々の紅葉, 常磐木に  
 混り,」

と連綿と詠嘆的に微細な描写をし, 情緒的な表現で人生  
 の哀感を表現し, 和歌的世界を表出しているのに対して,  
 『奥の細道』では

「是より野越にかゝりて, 直道をゆかんとす。遙に一  
 村を見かけて行に雨降日暮る」

「明れバ又野中を行」

といった事実の簡潔な描写しかみられず, 那須野の情景  
 についても「野夫」のことばをかりて,

「此野は縦横にわかれて, うるうるしき旅人の道ふミ  
 (ママ) たがえんあやしう侍れバ」

とわずかに広漠と広がる那須野の広がり, そこに生い  
 茂る野草灌木のさまを想像させるにとどまる。これは『陸  
 奥衛』の「深き野を分入程, 道もまがふばかり草ふかけ  
 れば」と併せ考えると, 実情は芭蕉・曾良はこの那須  
 野の道行きに難渋したのであろうのに, その本文の描写で  
 は, いとも簡潔な描写に終わっている。そこには, いさ  
 づかの情緒的描写も, 詠嘆的心情も見ることにはできない。

那須野の一夜の宿りについては, 『白河紀行』では

「暮るゝほどに大俵といふ所に至るに, 賤しの民の戸  
 を宿りにして, 柴折りくぶるなどを, 様変はりて哀れ  
 も深きに, うちあはぬ賄などはかなきを言ひ合はせ  
 て, 泣きみ笑ひみ語り明かす」

と, 一夜の宿りについて「賤しの民の戸」の「うちあは  
 ぬ賄などはかなき」ことに触れ, 「賤しの民の戸」とい  
 うことばには, 連歌師宗祇の見識の一面がうかがわれる。  
 一方芭蕉の方は, 曾良の『奥の細道随行日記』によれば,  
 その夜玉生の宿については,

「同晩玉入泊宿悪故無理ニ名主ノ家入テ宿カル」

という状況であったにもかかわらず, 芭蕉は『奥の細道』  
 本文では,

「農夫の家に一夜をかりて」

とのみ, さりげない表現で, 旅の宿りの苦しさなど, む  
 しろ素味と思われるほど簡明な表現をしている。

このあたりにも, 宗祇が「様変はりて哀れも深き」も  
 のと感じ取り, 「はかなきを言ひ合はせて, 泣きみ笑ひみ  
 語り明かす, 回想的な過去をふりかえる情趣に浸って

いるのに対して, 芭蕉は, 事実のみを, 何の脚色も施す  
 ことなく述べているにすぎない。宗祇の言う「哀れも深  
 き」は, 情緒の深さとも悲哀感の深さとも理解できるが,  
 芭蕉の場合は, 転宿したことさえ触れぬ抑制した表現を  
 としているところに, むしろ自己の世界の表出を意図し  
 ているものと考えられる。

さらに, 人との出会いについて, 『白河紀行』では,

「主の翁情ある者にて, 馬などを心ざし侍るを, こし  
 にかゝりて, 悦びをなして過ぎゆくに」

と, 馬の手配をして土地不案内の宗祇に心を配ってくれ  
 た宿の主——これは「賤しの民の戸」の主であるが——  
 に対して「情ある者にて」「悦びをなして」と, 主の好  
 意についてのみ触れて, 主の人物についての所感には触  
 れていないのであるが, これが『奥の細道』では

「草刈おのこになげきよれば, 野夫といへども, さす  
 (ママ) がに情しらぬにハ非ず」

と, 好意の主について具体的な表現で「おのこ」を「草  
 刈」と具象化し, 自分が「なげきよれば」と積極的にこ  
 の難路を克服しようとした態度を示すと共に, 「野夫」と  
 言いながらも「情しらぬにハ非ず」と性格の描写にまで  
 及び, それが庶民的感觉, 素朴な生活感情の持ち主であ  
 ることに触れている。これは芭蕉の旅に求めた,

「只一日のねがひ二つのみ。こよひ能宿からん, 草鞋  
 のわが足によろしきを求めんと計はいさづかのおもひ  
 なり」もしわづかに風雅ある人に出合たる, 悦びか  
 ぎりなし。日比は古めかし, かたくななりと悪み捨た  
 る程の人を, 辺土の道づれにかたりあひ, はにふ, む  
 ぐらのうちにと見出したるなど, 瓦石のうちに玉を拾  
 ひ, 泥中に金を得たる心地して, 物にも書付, 人  
 にもかたらんとおもふぞ, 又是旅のひとつなりか  
 18) し」

といった芭蕉の, 旅に期待したものの実現した喜びを伝  
 えたものと言えよう。それは「野夫」のことばとして,  
 (ママ) 「うるうるしき旅人の道ふミたがえん, あやしう侍れ  
 (ママ) ば, 此馬のとどまる所にて馬を返し給へ。」

と言わしめたことで, 一層明らかと言えよう。質朴な「草  
 刈おのこ」の面目が躍如として表れ, しかも後半にみら  
 れる「此馬のとどまる所にて馬を返し給へ」ということ  
 ばは, 和歌や連歌の幽玄の世界ではなく, 人情をうがっ  
 俳諧の世界そのものである。

いまひとつ触れたいのは宗祇の歌と芭蕉の句について  
 である。宗祇は

「かなしき事のみ多く侍るを思ひ返して」  
 という前書き風のことはにつづけて、  
 歎かじよこの世は誰も憂き旅と思ひなす野の露にま  
 かせて  
 と乱世に生き、漂泊に生きる苦しさを告白している。自  
 己の生活を「かなしき事のみ多く侍る」と自認し、その  
 乱世の中での諸国漂泊が、風雅を求める目的のみでなく、  
 生活のためにも余儀ないものであったことを示すもので  
 あり、そういった心情は、地の文の中にも

「行末いかにとためらひ侍りながら」  
 「かかる道には命も絶え侍らんとかなしきに」  
 「秋風の涙は身ひとりと覚ゆるに、同行皆々物がなし  
 く過ぎゆくに」

など諸所に悲哀と孤独感があふれている。

その上、この『白河紀行』では、那須野の条のみをみ  
 ても、右大臣実朝初め『古今和歌六帖』『万葉集』などの  
 古歌を背景にした描写がめだち、過去の世界、古典への  
 回顧的感傷をみることができる。

これに対して『奥の細道』の描写は、

(ママ)  
 「ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。独ハ小  
 姫にて、名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりけ  
 れば、

かさねとハ八重撫子の名成べし 曾良」

と、曾良の句とはなっているが、男女と思われる可憐な  
 幼児を配し、女兒の「かさね」という優雅な名もこの一  
 節をひきたて、文章に変化を与える役割りを果たしてい  
 る。曾良の句は、一句だけ独立しては、句意を理解  
 にくい作品であるが、本文が詞書のはたらきをして、  
 双方がひびき合い美しい情景の抒情的描写を構成している。

この「かさね」の句と地の文は、市振の条の遊女との  
 出会い、「一つの家」の句と共に、『奥の細道』中のあて  
 やかな人事を扱った代表的な場面であり、全体の流れの  
 中に変化をもたらすきわだった部分であるが、こうした  
 変化も『奥の細道』を連句的構成とみる大きな要素とな  
 っていると言えよう。

ところで、本稿冒頭に引用した『笈の小文』の一節や  
 『幻住庵記』の初稿と思われる『芭蕉文考』<sup>19)</sup>末尾の

(ママ)  
 「凡西行・宗祇の風雅にをける、雪舟の絵に置る、利  
 休が茶に置ける、賢愚ひとしからざれども、其貫道す  
 るものは一ならむと」

などに見られるように、風雅の伝統、俳諧の精神的基盤

を貫道する一つのものとして、自己をその伝統の系譜の中  
 に位置づけようとしているわけであるが、一面では、先  
 に那須野の条で見えて来たように、あるいは「時雨」の句  
 や「藤の実」の句について触れて来たように、西行や宗  
 祇に代表される和歌や連歌の理想像を受容しつつ、自己  
 の実践的体験を通して、俳諧の上に移植しようと試みた  
 わけである。一方で、先人や伝統への深い傾斜を示しな  
 がら、他方「古人も」「予も」の対比に知られるように、  
 和歌の流露のみに流れるのではなく、俳諧的抑制の中に  
 自己の文学的方法を発見しようと努めていたとみること  
 が出来る。

このことを芭蕉自身の発言にみるならば「三聖図讀」<sup>20)</sup>の  
 「されば文明のころ、其道さかなりし聖たちの言葉、  
 今の掟となりて、其実なる事、今の人のすさむ事かた  
 かるべし。されども風雅の流行は、天地とともにうつ  
 りて、只つきぬを尊ぶべき也。されば宗祇・宗鑑・守  
 武の寿像を求めて……(略)……道のただ萬古にさか  
 んらんことをいのる而已」

ということばにも、伝統の骨格を宗祇に求めていること  
 がわかる。こうした伝統の骨格とは、別のことばを用い  
 て言うならば、和歌・連歌・絵・茶など伝統的芸術の底  
 に流れている、時代を超越し、表現の方法やジャンルを  
 超越して、すべての芸術に貫流する、一般的普遍的なあ  
 るいは本質的な精神的基盤といえよう。そうしたものを  
 芭蕉は一応肯定し受容しつつ、俳諧でなければかなわぬ  
 もの、その時代でなければかなわぬもの、自己の美的理  
 念にふさわしいものを追求しようとしている。このこと  
 は、作家のあり方として、当然のことであるといえるの  
 であるが、その意味で、那須野の条の対比を見ても、宗  
 祇を意識し、これを認めながらも、自らの追求には酷し  
 く立ち向かったということであり、「時雨」や「藤の実」  
 の句においても同様のことが言えよう。

(1976.9.20受理)

## 注

- 1) 「送許六詞」(『韻塞』 元禄6年刊)
- 2) 「芭蕉翁終焉記」(『枯尾花』 元禄7年刊。其角編)
- 3) 天和3年。『虚栗』(天和3年刊。其角編)所収。  
「和漢文操」「笈日記」にも異形の句がみられる。
- 4) 『新撰菟玖波集』巻20発句下所収。
- 5) 俳諧撰集。元禄11年刊。風国編。

- 6) 俳文集. 享保8年成, 享保12年刊. 支考編。
- 7) 俳諧撰集. 元禄8年7月15日自序. 支考編。
- 8) 俳諧撰集. 天和3年刊. 其角序, 芭蕉跋. 其角編。
- 9) 法橋吾山著『朱紫』。天明4年刊. 俳諧註釈書。
- 10) 元禄元年または元禄2年. 『藤の実』(俳諧撰集. 元禄7年 親長跋. 素牛編。)所収。
- 11) 『曠野』(元禄2年3月, 芭蕉桃青序. 檀木堂 荷今編)所収。
- 12) 俳諧註釈書. 天明2年刊. 春稍庵梅丸編。
- 13) 俳諧註釈書. 寛政7年成. 信天翁信胤著。
- 14) 当時関東にあった宗祇が, 応仁2年10月, 白河の結城直朝に招かれ下野から那須野を通り, 白河の関に赴いた折の連歌紀行。巻末に付した「応仁2年10月22日」付の百韻連歌でその成立の時期を知ることができる。
- 15) 曾良『奥の細道随行日記』4月2日の条。  
『奥の細道随行日記』は元禄2年及び元禄4年の日記が中心で, その元禄2年の部分がいわゆる「奥の細道」の随行日記にあたる。
- 16) 俳諧紀行. 元禄10年 素堂跋. 太白堂桃隣編。
- 17) 『新編ミの虫』所収の真蹟懐紙. いま『校本芭蕉全集 第6巻 俳文篇』による。
- 18) 『笈の小文』(俳諧紀行. 宝永6年刊。)芭蕉の貞享4年10月から翌貞享5年4月須磨・明石を巡るまでの紀行。
- 19) 享和元年奥. 写本. 杉氏某編. 『校本芭蕉全集第6巻 俳文篇』所収。
- 20) 『花はさくら』(寛政13年刊. 秋尾編。)[校本芭蕉全集 第6巻 俳文篇]所収. 元禄5・6年に書かれたものか。

[筆者 本学講師]